男友だちの部屋

佐藤愛子

男友たちの部屋

佐藤愛子

男友だちの部屋
一九八一年九月二五日　第一刷発行

定　価　八八〇円
著　者　佐藤愛子
発行者　堀内末男
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部（〇三）二三八―二八四二
販売部（〇三）二三八―二七八一
印刷所　凸版印刷株式会社
検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

© AIKO SATO 1981　Printed in Japan
0095-772340-3041

目次

男友だちの部屋

大佛さんと案内人　11
カッパちゃんの報告　17
まことの男とは　22
芸術家の会話　28
女先生と劣等生　34
変型男友だち　40
悪くない仲　45
あまりに哲学的な？　51

哀しきウンコ　56
ホコリ高きアナグマちゃん　60
合理的解決法？　65
嗚呼！　ウナギちゃん！　71
とびはねウサギ　76
にっくきウサギ　82
悠然たりウサギちゃん　87
タヌキちゃんのソファ　92
どっちが悪い？　98
ケチケチダヌキ　103
おタヌキよしのタヌキちゃん　108
思い出すさえ胸痛む　114
七色パンツの男　120
夫、恋人、弟、乾分、どれでもない　126

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

今になって　131
ああ、人生！　136

中くらいの感想

男はたいへん　143
面食いばなし　152
今日このごろ　160
パパという名のおじさん　167
失敗か、失敗にあらざるか？　174
昔の女学生　180
青春、一回目と二回目　185
ミーちゃん　ハーくん　189
言葉のファッション　193
バラの話　197
五十五歳のこども　201

五十一歳のわるさ　208

ちょっとした感想

歴史上の人物　219
女　220
愚知女房　221
女流　223
三十四年　224
オモチャとクロサワ　225
女みたいな男　226
流行語　228
思い上り　229
娘の疑問　230
年を送る　232
私があきれるとき　233

言葉の洪水　236
私が感心するとき　238
私が可哀そうに思うとき　240
私がむくれるとき　242
天下泰平なのは誰？　244
新聞への注文　247
ストレス解消法　248
姑のストレス　249
怒号は百薬にまさる　250
熱の話　251
世田谷区太子堂　252
ストレスなし　254
TVと話す　256
鼻の先　258

装幀　山藤章二

男友だちの部屋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

男友だちの部屋

大佛さんと案内人

カッパちゃんは私の二十年来の親友である。

初めて会った時は定時制高校の英語の先生をしながら、小説を書いていた。

「ほんとう!?」

と私は思わずそういったことを憶えている。

――ニセ教師ではないか？

そう思ったのだ。

本当だと知って、へーえ、日本も変ったものだなァ、と、改めて「敗戦」がもたらした日本の変貌について感慨をもよおした。私のような戦中派は、教師というものは、人の範たるべきものゆえ身をつつしみ、尊厳を保つべく努力しているものだ（あるいは努力しているようなフリをしているものだ）と思いこんでいたからである。どちらかというとお嬢さん育ちの世間知らず、親の訓(おしえ)え、世間の通念に馴れていた私のマナコを、真実に向って開かせてくれたのがカッパちゃんだ。

つまり、教師といっても、いろいろあらァな、ということを彼は身をもって教えてくれた。彼は英語の教師として、ベッピンの女生徒のテストの点をおまけしてやったりした。デキの悪い女

生徒であるにもかかわらず、（解答、いっぱい間違ってるのに）「九〇点！」とつけたりした。
ベッピン生徒の方は……
ここまで書いて、私は考えこんだ。何しろ二十年も前に聞いた話である。どうだったかなあ……ベッピン生徒は点数がよすぎることに気がついて、
「先生、この点数、違ってます」
といいに来たのだったか、それともカッパちゃんの真意は黙殺されたのだったか、記憶が曖昧である。そこで私はペンの手を止めて、カッパちゃんに電話をかけた。
「もしもし、あのね、あなた、昔、高校の先生してたとき、女の子のテストの点数をおまけしてやったことがあったでしょう？」
「うん？　ああ、あった……」
いきなりこういうことをいい出しても驚かず、わけも聞かずに、ただちに応答するところがカッパちゃんのラクなところである。
「あの後、女生徒はどうしたの？　訂正に来たの？」
「うーん、あれはどうだったっけかなあ、あれはねえ……何もいって来なかったと思うよ」
「すると、つまり、あなたの気持は黙殺されたわけね」
「いや、ちがう。それは暗黙の了解というか。共犯意識というか……」
暗黙の了解？　共犯意識？
彼女はにっこり、おまけの点数を受け入れたというのか！　おまけの点数を受け入れたという

ことはカッパちゃんの気持も受け入れたといいたいのか！
また、そう自分に都合のいいように解釈するッ！
と私は怒りたくなる。女の子にしてみれば、カッパちゃんの卑しき心情を察知して、
「ふン、フケツ！」
敢然と黙殺したのかもしれないではないか。それともテンから甘くみて、
「アラ、またこんなことをしてる、あの先生たら！　ウフ、フ」
と笑って、ポイと答案用紙まるめて屑籠に捨て、忘れてしまったのかもしれないではないか。

「男友だちの部屋」
この連載を始めるに当って、登場する男友だちはみな、本名を伏せてニックネームで書こう、と考えた。ニックネームといっても、私が即席で勝手につけるニックネームであって、公のものではない。本人も知らない。
例えばカッパちゃん、タヌキちゃんなどといっても、必ずしも顔がカッパに似ていたり、タヌキに似ていたりするとは決っていない。何となしそういうカンジで、勝手に（気分あるいは出まかせ）つけるニックネームである。
私はカッパちゃんにまた電話をかけた。
「あのね、あなたのこと、書くんだけど、本名は出さないのよ、ニックネームをつけるの、どんなのがいい？」

すると彼はいった。
「ヒカルちゃんがいいな」
「ヒカルちゃん？　なに、それ」
「光源氏のヒカルちゃんだよ」
「何をいってるのよ！」
私は思わず叱咤の口調になり、
「光源氏はもてたのよ。あなたが似ているとしたら、気が多くてすぐ口説くところだけじゃないの、その後がぜんぜん違うのよ」
「そうか……」
カッパちゃんはいともあっさりうべなって、
「じゃあ、何でもいいや」
「カッパちゃん――どう？」
「カッパちゃんか……ま、いいでしょう」
と電話を切った。カッパちゃんは私の言葉には、忽ち従うのである。彼は諍いを好まない。諍いをしても、勝つみこみなど全くないことがわかっているからである。
カッパちゃんは今は小説家だが、だいたい、彼の書く小説に強い男が登場したためしがない。いつも弱虫で女好きである。ほかのことは不精だが、女をくどくことだけはマメだ。弱虫だが、セックスだけは強いのである。私が、カッパちゃんの友だちであることを知っている人は、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com